

カスタムした廃ゲーマーがダンジョンに出会いを求めるのは間違っているだろうか

RE A

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある少年がトラウマを発症し、引きこもりそして体のみ大きくなった成人へと変わった今

出会いと言う` 冒険 ` の物語が始まる

—————

誤字脱字は遠慮なくどんどん指摘いただいて構いません。

オリ主最強物が苦手な方はブラウザバックをおすすめします。

またこれが最初の創作物なのでこうした方がいいなどのアドバイスを頂けると幸いです。

不定期更新ですがよろしくお願ひします。

目次

3 1 1	3 1 0	3 9	3 8	3 7	3 6	3 5	3 4	3 3	3 2	3 1	オ ラ リ オ 編	2 4	2 3	2 2	2 1	物 語 り 始 動	1 4	1 3	1 2	1 1	プ ロ ロ グ
52	50	47	43	40	37	33	30	27	25	23		20	18	16	13		8	6	4	1	

プロローグ

1—1

もう夜遅く、ある者はまた上司に文句言われるのかと気分を落としまたある者は、今日は泊まり決定ダナーと片手に缶コーヒーでいつ終わるか分からないブラックマラソンを続ける事を選択せざるを得なかった者

「この世界は平和か？」と聞かれたら貴方はどう返すのか？

「平和です」と答えるのが大半であろう実際人が死ぬ確率だけで言えば明らかに平和だからだ。

では、この質問はどうだろう

「貴方は今幸せですか？」この答えは大半がNOと答えるだろう。

それはそうだろう サービス この言葉を聞くだけで嫌そうな顔をするだろう。

これが自分の勤めてる会社が他の人が評価されるならばやる気も金も明らかに違つて来るだろう。

だが大半は犠牲と言う社会で成り立っているのが現実だ

無能な上司に働く空気が最悪で無茶振りが当たり前前な風潮 社会はクソだが皆が回さなければ絶滅待ったなしの崩壊が待っているくらいバカでも分かる。

だからこそクソ真面目いわゆる社会のお気に入りは簡単に使い捨てにされる。

頑張らないやつが長生きする本当に最悪でしかない

さてそんなどうでもいい前置きは置いて本題を話そう

今作品の主人公の名は 伊藤宗二 という名だ。

彼は今最早評価が最低ランクのクソゲー認定されてしまっているMMORPGであるアーカディア・オンラインのコンストしたアバターを見ながら最後の別れを惜しんでいた。

—————

名前：カイル

Lv:1000

種族:ヒューマン

職業:剣闘士

サブ職業:鍛冶師 錬金術師 彫刻師 薬師

裁縫師 盗賊 調理師 賢者 聖職者 暗殺者

HP:99999

MP:99999

STR:99999

DEX:99999

VIT:99999

AGI:99999

INT:99999

MND:99999

LUK:99999

—————

はつきり言っただうしてこうなったか分からないやり方である。

他のMMORPGならばもう少し考えてビルドを積むのだがこのゲームでは一応公式ではレベル制と発表しているが、課金すれば誰でも最強キャラが作れて仕舞うのがこのゲームの弱点であり俺が年単位でやってる理由だ。

他のMMORPGではバランス調整などを行い楽しく長く続けられる様にするのだがこのゲームでは露骨過ぎる課金が沢山ありすぎである意味楽しめた理由の一つだ。

それに一番高い課金でも500円までと学生金額でバランス調整なにそれ美味しいの?と言ってる様なバランスが全く取れてない状態だった。

だがグラフィックや自由さは他のゲームと比べて1桁クラスのゲームでもあったため3万のユーザーと中々の盛況ぶりだった。

それでも終わりは来るもので刻一刻と時間が過ぎていった。

そんなことばかり考えていて俺は目が暗闇に包まれた。

目を覚ますとそこには一面のお菓子があった。
そう現代日本にあるお菓子だ。

「なんでなんだよ!!」

よく見るとテレビやパソコンなど俺の部屋以上に高そうな物がちらほらとあった。

まさしくヒキニートそのものを表した様な空間だ。

頭の中がぐじゃぐじゃになり思考停止状態になり掛けたとき更なる混乱が俺を襲った。

「あれ〜なんで下等な家畜君がいるのなかな〜?」

声が聞こえた方へ顔を向けると(てか俺への罵倒酷すぎない)そこには水色の髪にロングストレートでおっとり系な顔をした美女がキングサイズのベットにうつ伏せながら此方を見ていた。

取り敢えずここは何処か聞くか

「え〜つと、ここはどこなんでしよう。」

「え〜君さ〜私の名前聞かないの〜だから君はさ〜いつまで経っても童貞君なんだよ!」

ふ〜 落ち着け〜 そう落ち着くんのだ。 平常心 平常心だ

「それはすみません私は無知なものでよろしければお名前を教えてくださいませんか?」

「そうそう無知で家畜な君は高貴で美しく慈悲も残っている私との接し方を理解しているじゃないの無能な家畜にしては、まあ〜下等な存在であるものに教えるのは高位な者の義務のようなものね仕方がないから教えてあげるわ私の名はエデュランよ!」

長い ものすごく長く長いただ名前言えばいいだけなのになんなの一々俺を見下さないと会話出来ないのつくかそもそもここが何処か答えてもらってないし〜か部屋汚いななんだこのゴミ屋敷は歩く

ところほぼねえーじやねえーか！

あゝめんどくさい めんどくさいが聞き出すしかないそもそも俺ただ家でネットゲしてただけなのになんでこんなことに巻き込まれてんだよコンチクショウ！

ふゝ 落ち着けゝ落ち着けゝ 深呼吸だゝ

感情のままぶつけてもろくなことにならないことなんて社会人なら知ってることだ。

社会出たことないけどなんなら中学から外にでてないけどそれでも子供のようにわがママを言つてうまくいくことなんて0に等しいなら理性的に情報を引き出していくしかない。

思い出せ小学生の時に大人に幻滅したあの時の感情をあの妙に冷静に慣れた時の気持ちちを再現するんだ。

よしっ 冷静に頭が冴えてきた。

さゝて下手に下に出過ぎると後々面倒だらうまく言葉をに濁すしかないが俺にそんな技術ははつきり言っていないならそもそもそういう感情を俺自身が無くせば良い訳だ。プライドなんて後でいくらでも取り戻せるそうこれは戦略的に俺が負けることで話がスムーズに進むならもうこれやりきるしかねゝ！

このまま舐められるのははつきり言ってムカつくがそれは俺の知識不足つまり俺が怠惰だったからこそ招いた事態だ。

なればこそ今現在有効な手段は下に出ること相手に気持ちよくさせればスムーズに事が済む。

一個人の感情さえ捨てれば良いだけの話だ。

さくて 頼むから鋭い勘とかご都合主義みたいなあの女に起きるんじゃないぞ

「この無能な家畜めに高貴で美しいエデュラン、様”の知恵を貸して頂いてもよろしいでしょうか。」

「そうそう 賢い子って とつても私好感が持てるわ 良いでしょう 良いでしょう この高貴で美しい私の知恵を貸してあげるわ」

一々勘にさわる奴だが話が進むのはいい傾向だこのままスムーズに終わってくれまじで!!

「では、お聞きになりますがこの場所は一体何処なのででしょうか？」
「えくつ そこからく 何で理解出来ないのあんた本当に無知なんだからいい 此処はね下界と神界の狭間の一角よ後は何か聞きたいことある？」

つまり境界線の様な物か 後はアイツ自身の事だな認めたくないが異世界系ラノベのテンプレに出てくるあの高位な情報体なのである認めたくはないが(大事なことなので二回いった。)でもやはり間違っていてくれ初めて見たのがあれとかどんだけ運持ってないんだよコンチクショウ!

「それでは遠慮なくお聞きします。貴方様^{あなた}はどのような立場なのでしょうか？」

「へえく 下界の子にしては中々に鋭いじゃない いいわ下界の者には勿体ない気もするけど教えてあげるわ 怠惰を司る神 エデュラン よ!!」

まあくた随分と派手な演出だなく! ようやくベッドから下り一面真っ白なワンピースを着ていて首とお腹の間に穴がありそこから

程よい双つの豊かな果実が見え屈辱にも美しいと思ってしまったのだった。

ホントにさく　こういうのは神視点なら楽しめるけど目の前にいるとただただムカつくだけだな。

「そうでしたか　通りで今まで会った下界の者たちとは次元が違いますね!!」

「あつたり前でしょ　あんな低能な存在と一緒ににはしてほしくは無いわ!!　今日はきぶんがいいわサービスしてあげても良いわよ!!」

「そうでございますか　ならキープと言うことで最後に聞きたいことは俺はどうすればこの空間から出られるのですか?」

「そりゃ　転生してもらうまで閉じ込めて置いてさつきから言われてるからしばらくは掛かるんじゃない?」

うん?　さつきからだ!!

一体誰からなんだ!

って言うかこの女神それいっちゃっていいやつなの?

この女神駄目過ぎるだろ

さつき無視したけど怠惰って確かあの有名な悪魔ベルフェゴールの領分だったような

もうめちやくちやだー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!
!!!!!!

この女神に任せるその行為が愚策だとなぜ気付かないんだろう？
こんなにボロが出まくって居るのになぜなんだ???

神界つてもしかしてどうしようもないバカばかりなのかそうなのか正直言つて俺はあの自称女神『笑』よりも必死に裏で操ろうとしているあんたと直接話したいよ全然話が進まないんだよ

頼むから マジで頼むから交代してくれ チェンジしてくれ聞きたいことが沢山あるんだよ。

例えば転生の事とか転生の事とか(大事なことなので二回いった。)転生してくれるのならチートな生活を送りたいんだ。

もう努力とか知ったことか今まで意味不明過ぎるとか はっ？
例えば酷すぎるとか思つてごめん なるう系この暴君な堕女神よりも話が出る神様と出会えることこそがチートを貰えるチケツトのような者だったんだね。

気づかなくてごめんなさい話が通じないってこんなにしんどいんだねお母さん最後まで迷惑かけてごめんね本当
という事でさっさと俺の前へとでて来なさい。

おふぎけ禁止 まじでやりたいこと沢山あるんです。
チートして現地人に努力おつーとか言つて人生ナメプしたいんです。

人間としてどうしようもない屑として悠々と暮らしていきたいんです。

もうね 屑はね更正 しようがないんだよだからね俺から提案があるんだ屑はね敵キャラにしちまえばいいんだよ。

わがままな悪い奴を倒すために立ち向かうほら誰もが求めるとても単純な善悪の物語だ。

ね！ 良いでしょ！ 良いでしょ！

屑を100%理解出来る俺だからこそ考えつくことだよ。

もうそれで良いじゃんだからさマトモな神降臨プリーズ

そして何も起こらなかった……

神は存在しなかった。

えっ？ 神は願望を叶える存在じゃないってえっ？ じゃあさく何のために存在してんの 見守ってくれるだけでありがたい？ はあ？ いいか俺が教えてやるよいいか俺が神に叶えてもらいたいのはごくごく普通でちっぽけなお願ひ事なんだいいかよく聞け イケメンでカリスマで天才で幾つになつても元気で金持ちでめっちゃくちゃ可愛い幼なじみの女の子との縁ができて取り敢えず高スペックな存在になるというささやかな願ひであつて汚い欲望で自己中心的な願望じゃあないごくごくささやかな願ひだ。

さくて そろそろ思考を本来の目的のために動かすか。

「え〜つと 高貴で美しいエデュラン、様 不躰なお願ひがあるのですが私目をその転生と言うものに興味がありません。 何卒無能な私目に知恵を授けて下さいませ。」

「ええ いいわ やつてあげるこの高貴な私がね転生を」

この駄女神話聞いている？ 説明しろと言っているのに何勝手に転生始めてやがるんですかね〜？

知性あるのかホントにチンパンジーでももう少し考えて生きてるぞ

あ〜つクソ俺の知ってる転生かどうかなんて保証がないから安全第一に考えていたのに全部パ〜じやないかまさか素のスペックじゃないだろうなら間違えなく死ぬのは確定事項だならもうこれは賭けに出るしかねえ！

普通に考えてもこんなわがまま通じないなんてわかつているだがこの駄女神ならば行けると信じるしかねえ

待つてろよ俺のナメプ人生〜!!!

「エデュラン、様 これは大変無礼を承知で申すのですが私から提案があるのです。」

「ほうつ 下界の者が私に提案を申すのか？」

「はいっ 提案でございます。」

「ふむ 良いわ多少興味が無いこともないしね ただし私の貴重な時間を使っていると言うことを自覚しなさい。」

「それでは 私と賭けをしませんか？」

「賭けですか？」

「ええ 賭けです。」

「ふくん 内容次第ね 続けて」

「では、まず私に9つのチートと呼ばれる概念を授けて下さいませ。そしてエデュラン、様 は転生先の世界で私には一生掛けても不可能と呼ばれるものをクエストとして発行してください。期限は先ほど言いましたように私の寿命まで、乗ってくださいますか？」

「あら、下界の者にしては私が有利でしかありませんが、勝つ気あります？」

「ええ、これは賭けでございます。ならよりスリルがある方が燃えると言う者でございましょう。」

ふく、こんな感じかな

こんなので騙せる事が出来れば上出来なんだけど

ホント、こういう下らない才能だけはあるんだよなくやっぱりもつとキラキラした才能がほしいものだ。

「ええ、いいわならチートとやらをとつと言いなさい。」

「それでは、まず【健康】と言うチートをください。」

「はあ？ えっ？ ホントにそんなので貴重な一個目良いの？ 私が言うのも何だけど。」

「ええ、充分チートですよ。だっていつでも元気で病気が発症することもなく年をとっても若々しくいられるのですから！」

「まあいいわ次は何？」

「次はですね〜【天才】ですね」

「まあこれなら良いわね、さくて次は何？」

「それでは【ステータス顕現】ですね」

「急にRPG感が出てきたわねさて次よ」

「じゃあ、転生する世界の情報を直接脳内に入れてください」

「はあ？ あんたホントに何いってんの？」

「そんなに不思議なことでしょうか？ だって知らないのと知っていないのでは難易度が違って来るじゃないですか。」

「まあいいわどうなっても自己責任よそれ」

なんだこれ、めちやくちや情報が入ってくる。だが大まかなことは理解した。成る程これはとつてもファンタジーしているな。よし想定内で良かった!!

ここから自重無しで行くぜ

「で次は？」

もうめんどくさそうだな

まあ短くする気更々ないけど

「それでは私が嵌まっていたネットゲのアバターのまま転生させてください」

「ちよつと待って流石にそれは無理があるわだからね

アバターのステータスを初期化するかストレージの中身を空にするか選びなさい。」

「では、ストレージの中身を空にしてください。」

「あんた迷いなく言ったわね。それで次は？」

「次はですね、【自動再生】をください！」

「ホントに迷い無いわね！で次」

「それでは【成長限界突破】をください！」

「次！」

「それでは【不老】をください。」

「はあ？ あんたまさかそれが最初だからそのつもりだったわけ？」

「私は別に普通の人間として天寿を全うするなど一言も言っていないですよ？」

「ああそう、あんたがそのつもりならこつちも容赦しないわ！さあ最後のチートは何かしら？」

「では、【免罪】と言うチートをくださいエデュラン、様！」

「つつつ!!あんた一体なにをするつもりよ！」

「いえいえ、単なる保険のためですよ」

別に嘘は言っていない。転生先の世界では結局表面的な情報しか手に入らなかつた。人類が求め続けるとしても魅力的な物、そう不老不死だ。

だがあの世界では、神が居る。切り札位持つべきだ。

さあーつて是非とも幾つでも無理難題言つてください。

ただし此方には叶えるメリットもデメリットもないことも気づいてない駄女神さん

「それじゃ〜言うわね 黒龍 討伐をソロでやりきること!!!」

この駄女神まさか一個だけとか思ってたのか？

嘘だろなんか可愛そうに思えてきたよ。

残念すぎるわ〜つて言うか今まで散々嘘ついてきたのに何でこの駄女神気づいていないんだろ？

普通結構最初の頃から気づく物だが？

そして俺の周りには暗闇へと「仕方がないから私もついて#\$%& a m p ; # 「気のせい 気のせい

だよね
!!!!!!

物語り始動

2—1

今、俺の目の前にはそこそこ髭を生やしたおっさんがいる。
さてどうしてなのだろうか？

どうせなら美少女が来て欲しかったな〜

そんな呑気なことを考えていた。

と言うかこのおっさんいつまでいるつもりなのだろうか？

って???言うか今時 焚き火なのかかよ!!!

仕方がないので起きるフリをした。

「う〜ん？ ここは？」

現代日本と違つて夜はやっぱり一面真っ暗だ！

ここは町でもないから光を必要としていないのだろう。

「おう 起きたか兄ちゃん 早速で悪いが服くらいはきた方がいいぞ

？ 俺のを貸してやるからさ」

通りで風通しが良すぎると思つてたんだ。

「ああ 悪いな 助かる」

服を着ている最中に一通り自分の体を見たが俺の体はしつかり

ゲームアバターである カイル の様な体つきになっていた。

やっぱり試してえよなじやあやるか！（ステータス鑑定）

—————

名前：カイル

Lv：1000

種族：ヒューマン

職業：剣闘士

サブ職業：鍛冶師 錬金術師 彫刻師 薬師
盗賊 裁縫師 調理師 賢者 聖職者 暗殺者

HP：99999
MP：99999
STR：99999
DEX：99999
VIT：99999
AGI：99999
INT：99999
MND：99999
LUK：99999

今俺がいる場所は人が通りやすそうな平坦な道がありその周りは木々が生い茂っていてファンタジー作品でよく見た馬車があつた多分このおっさんであろう

「そうだ！ 兄ちゃん まず俺の名から教えるぜ！俺の名はアーリツクつうんだ！ で兄ちゃんの方はなんつうんだ？」

まあ別に無防備な状態の俺を起きるまで側にいたし悪い奴では、無さそうだしな別にいいか

「俺の名はカイルつつうんだ！」

まあこう言うのはお約束だよね!!!

「そうか そうか 兄ちゃんカイルつつうんだな立派な名前じゃねえーか！」

ホント このおっさんいい奴だな

まあちよつと臭いが許容範囲内だし

「そういえばアーリックさん何で身ぐるみ全部を失なってる俺を見捨て無かったんだ？」

「何でって？ そりゃあ、この近くの町ついたらダンジョン都市オラリオでしかもその体つきはそれなりに過酷な鍛練を積んできた者にしか表れねえからな！ まあ努力家に悪い奴は居ねえなんて言う俺のエゴ見たいなものさ！」

嘘だろ!!! 　どんなお人好しだよもしアーリックさんと同じ状況に俺がなっても全裸で筋肉が発達した男なんて無視するのが一番安全な方法と言うのは普通の事だと思っんですよ!!

だって 人の良心につけこんだ盗賊としか思えないんだもん！

自分で言っけて気持ち悪くなってきたやはりこう言うのは美少女が言っけて初めて成立するんだと改めて思った。

それなりにおっさんも思うところがあるのだろう まあ 俺鍛練なんてしたことないけど（笑）!!

しっかしあの堕女神それなりに仕事は出来るんだな正直手抜きしているところが多々あると覚悟していたのだが

いや 上司的な存在がいんのか命令されてたしでもアイツ意図をさっぱり理解してないっぽいしもう考えるのはよそう気分が悪くなるさあゝって今から異世界でチーレムしまくっちゃうぞ!!!

まあ 冗談は置いといてそれとなく市場の状況聞ければ最高なんだがこれは他でやっつくか

異世界での初めての旅は商人のアーリックと共に始まった。

一応 馬車の警護という名目で雇って貰った。

内容はダンジョン都市オラリオまでの警護だ

ホントにいい人過ぎるだろく!!!

今俺はアーリックに馬車の中にいる椅子などはないので足をくずして座っているちなみにアーリックは御者台で

馬の手綱を握っている。

馬車の中はシンプルだった周りは少し黒ずんだ白い布が被われていて床は木目調であり恐らく商人であるアーリックの商品が木箱の中から多種多様な物が数個づつ置かれてあった。

何でも商品を絞ってしまうとやはり現地の商会の方へと客が行って仕舞うので出来るだけ買って貰うために仕方なく生活に必要な物や趣味様の商品を用意することで赤字を回避してきたらしい。

まあ 納得出来る様な出来ない様な感じだったのでわからないような振りをした。

まずは俺の装備だが全てアーリックの善意で古着を着させて貰っている。

だがあくまで非戦闘服だ！

次に武器だが解体用のナイフだけだ。

無いよりはマシだが相手が戦闘になったとき不利になるのは目に見えているため不安は残るばかりだ。

そんな事を考えているとRPG作品で最早レギュラー出演しまくっているモンスターを発見した。

ゴブリンである。

やはりゴブリンと言えば全身 緑色の体をし子供の身長より少し上の体長を持ち武器は手入れされていない武器を持って群れで人間を襲い男は殺し女は苗床とする非常に人間にとって害悪極まりないモンスターっていう設定が定番だったよな

この世界でもその様な扱いなのだろうか？

だがこれはチャンスだ俺がどれだけ戦えるかの判断材料の時期が早くなっただけださてどれだけ強いのか（鑑定）

ゴブリンLv:1

流石 序盤の町にほぼ出てくる敵モンスターである。

異世界でもその地位に着いてるとは案外ゴブリンは勤勉なのかも知れない何故なら違う世界でも同じ運命を辿って要るのだ。

最早何も言うまい。

さてここまでゴブリンがお膳立てしてくれて要るのだ魔法で戦うなど野暮だろうなればこそこの解体用のナイフで戦うこと一択である。

「アーリック悪いが小遣い稼ぎさせて貰えると助かる。」

「ああ わかったがあんまり馬車から遠くへは行くなよ！」

「流石にそんな無責任なこととはしねえよ！」

そして結果は案外簡単に殺せた。

事の顛末はこうだ。

まずは一匹目を殺すためゴブリンとの距離を一気に詰め後ろに回りナイフで首に一突きを入れ妙に生々しい感触がしたが別に気に成る程でも無かったためナイフを抜くと血が此方にも飛び散ったが次のゴブリンに備えた。

次は一気に5匹に増えたが殺ることは変わらないので淡々と処理していった。

かれこれ8分でゴブリンを見える範囲で殲滅をした。

最初の方は自分の体の性能についていけなかった恐らく前世とのスペック差がそれだけ段違いなのだろう。

正直言ってもまだまだ戦い足りないだがせつかく仕事を貰えたのに自分の都合で人の好意を無下にするのは流石に遠慮したかったためあくまで馬車周辺にいるゴブリンを1匹残らず処理していった。

それからあの墮女神にもたらされた情報の中でモンスター達の心臓部に魔石と言う鉱物がありオラリオで魔石を売ることで冒険者は生活するらしい。

そして魔石を一つ回収するとゴブリンの体が灰へと変化したこれがこの世界特有の現象だ。

どうやらモンスターは魔石と言う動力源によって動いていて魔石を取る又は破壊によって灰になるようだ。

俺は冒険者になるつもり更々無いけどだって非効率極まりないしそれに・・・いやこれは俺が気を付けなければいいだけなのだからさそれよりちよつと試したい事がある。

前世でそれはそれは人生を捧げ続けたMMORPGであるアーカディア・オンラインだ。

このゲームにゲームバランスなんて物は一切ないだがそれはプレイヤーによるチート行為ははつきり言って不可能とまで呼ばれているほど鉄壁を誇っていた。

要はそこまでして課金を進めまくる珍しいMMORPGだった。

そうそれが常識の範囲である課金であるならばの話ならばだ。

このゲーム絶対マトモにゲームさせる気がないとしか言えない課金要素があったその一部が生産職の物を作るための必須である材料をそのへんの土や雑草さえ集めれば最上級アイテムを作れることを可能にする熟練度を最大まで上げまくる課金要素がある事だ。

つまり廃人確定無課金勢よりも廃課金初心者の方が強いのだ。

普通は逆であろうまあだからこそ自分は、嵌まってしまっていたがつまり何が言いたいかとこの周辺にある土と雑草でアイテム作れるんじゃないかって事だ。

早速ストレージに土と雑草を入れまくった。

他から見た場合細マッチョの男が必死に土と雑草を入れまくる絵面だ。

うん 只のやベー奴である。

だがつべこべいってられない後々自分が楽に慣れるからこそ今やるのだ。

く作業中く

さーてこれくらいで充分だろそろそろアーリックのところに戻るか

「おっ！ もういいの？」

「ああ もういいよアーリック」

そして再び移動を再開した。

そして俺は馬車の中でアイテム作成をするのであった。

まず最初に土を錬金術のスキル【変換】を使い 手に収まる程度の土からミスリル5kgへと変換させる。

え？ 何？ どゆこと？ そうこれが課金によるご都合主義である。

まあ ゲームだったし数字だらけの世界だったのを現実世界に連れて来たらまあチートしまくりだよね!!!

うん まあ 確かにこれはストレージの物を全て処分しないとま
じで只の無双より酷い何かへとなっていたかも知れないな。

流石に無から創ることは無理だが限りなくそれに近い形で再現は
可能だと言うことが解った。

と言うことでまずこのミスリル5kgを次は【凝縮】でより高位の素
材へと変化させたその結果ヒビイロカネが出来たこれを更に【錬成】
で完成したのはこれだ

――――
神剣 デュランダル

【破壊不可】【魔斬】【空間斬】【自動修復】【持ち主登録】

――――
なんか効果意味分かるの2個くらいなんですけど言うかネーミ
ング！何なのホントにダサすぎるよもつとこうオリジナルティーを
出せよ。

そして俺はストレージにしまった。

もういいのか さて次は土と雑草から【変換】ガラス瓶に液体が
入っているエリクサーの完成!!!!

――――
エリクサー

体力 精神力を治す。

全ての状態異常を治す。

――――
あとはエリクサーを量産していく仕方ないねだって魔力切れや体
力が危険値になったら怖いしね。

そして俺はストレージにしまった。

――――
後はライトアーミー的な軽装の鎧を作ったそれがこれ

ライトアーマー

【衝撃吸収】 【魔力吸収】 【自動修復】

———
もう俺は突っ込まないからな!!!
そして俺はストレージにしまった。

もうこれ普通にどうやったら倒せんだよってレベルだな
後何しようそう言えば経験値アップ的なチートでは選ばなかつ
たっけよし経験値ブーストを作ろう。

まず土を用意してお馴染みの【変換】ヒヒイロカネに変えますそこ
から【等価交換】を使い出てきたのは

———
経験値1億倍指輪
そのままの効果

———
わーすごい そのままでー ここまで来ると逆に凄い。
そして俺はストレージにしまった。

さーて後は何しようかそうだ身代わり○形的なの作ろう
出来たのがこれだ

———
身代わりの札
一回攻撃を身代わりする

———
これも量産した。
だって便利じゃん 後はダメージを与えてるはずなの的な展開
大好物なんだよねーまあもちろん攻撃する相手は美少女限定だけど
ね

他は徹底的に潰す。特に男とブス女には
だって時間の無駄だろ？

あつちなみに俺の言う美少女は容姿も大切だけど性根の腐ってな

い娘を指すから

「おー 見えてきたぞカイル あのでっかい塔みたいなのがあるだろ
あれがダンジョン都市 オラリオ が誇るダンジョンの一部さー」
ヘエー これが オラリオ かやっぱり大まかな情報より実際に
見た方がいろいろと感ずる物があるな

オラリオ編

3—1

この厳つい城壁に囲われている都市 オラリオ によろやく着いた。まあ1日？2日？程度の距離だったがまあその間にも着々と備える時間はその程度でしか無かったがそれなりに準備は整った。

「アーリックいろいろと世話になった。」

「なーに そんな感謝されることなんてしてねえよ。」

ホントにこのおっさんまじでカッコいいな

そしてそれぞれの目的地へと足を運んだ。

金は貰わなかった。 流石にいろいろと準備しまくっていたのでこれ以上甘えるのは筋違いだと思うからだ。

そして俺はダンジョンへと足を運んでいった。



現在俺はエイナさんと言うギルド職員に神ファールナの恩恵についてやファミリアについて説明を受けていた。

後はエイナさんが美人だったからでもある。

それにしてもよく聞く神の名が出てくる出てるまあお陰で混乱しなくてすみそうだ。

ただ 主神級のゼウスやオーディンがでて来ないあの強欲の塊見たいな神様の事だからってつきり地上に降りて好き勝手しまくっていると思っていたのだがまあ俺の気にし過ぎだろ。

へえーこのオラリオの最大ファミリアはロキ ファミア と
フレイヤ ファミアなどの北歐神話系の神がそれなりに力を
持っているようだ。

「それじゃあ 俺はロキ ファミアにいきます。」

「まあ カイルさんなら大丈夫だと思います。」

「それならロキ ファミアリアのホームの場所をお願いします。」

「はい わかりました。」

それからロキ ファミアリアの拠点エイナさんから場所を教えてもらいその日の内にいくことにした。

「あと ゴブリンの魔石を回収したので買い取ってもらえませんか？」

「えつと？ まさか ギルドの登録無しにダンジョンに潜られたのですか！」

「いえ 外のゴブリンを狩りました。」

「そつ そうですか 出来るだけ早くファミリアに入ってくださいね。」

「はい それは勿論！」

そしてようやく魔石を買いとってもらい子供の小遣い程度をようやく貰えた。

今自分が持っている全財産は350ヴァリス正直言って俺が小学生に持ってた全財産より少ないな前世の俺がどれだけ恵まれた環境に居たことを身を持って理解した。

さーて少し腹へったし屋台とかで何か買うか

「お 思ってたよりうまい」

俺が買ったのはじゃが丸くんと言う商品で一番安いプレーン味を買った。

30ヴァリスが飛んでいった。

それにしても良かったアーリックの時は食事に苦労した。

乾燥肉オンリーなのでそれはもうきつかった初めてかれない食事が嫌になるのは出来れば二度と体験したくはないが

そんな憂鬱な気分ですを進めると目的地であるロキ ファミアリアについた。

今いる場所は、ロキ ファミリアの本拠地 〈黄昏の館〉が見える範囲にいる。

わあー何ここ と言うか今すぐ館から城に変えろ勘違いしたじゃないか！

そこにはどこからどう見ても灰かぶりの城を意識していると思えない立派な城だった。

流石 トップクラスだけと言うことはある。

だがここでなら相当なことをやらない限り目立つことは無いだろう木を隠すなら森の中ってね。

さーて あそこにいる門番らしき人にでも聞いて見るか

「なーそのあんた うちのファミリアに入らへん？」

何処かの神にでも勧誘された人物でもいるのだろうか？

「なあなああってば、無視せんといえ〜うち悲しいわ〜」

話しかけられた方へと見てみると

朱色の髪に細められた目、とても美人で、朗かに笑っていた。

何処の神だ？ それになんだこの警戒を抱かざる追えないこの独

特な感じは

「あんたまさか腐の属性を持っているのか？」

そうできつとそうに違いない胸がないやつはだいたい腐だ。(偏

見)

「ちやつちやうわ!! うち美少女 美人にしか興味あらへんわー!!!」

なんだ腐じゃなくてレズビアンかまあ俺には迷惑かからなそうだししいや

さあ 早くロキに会わなくちやなロキってやつは男神なんだろうな。 しかもあのゼウスの親戚だし性癖やばいんだろ〜うな〜とこのでこの自称レズビアン貧乳女は無視だな。

と言うか関わり会いたくない何せこの女外で堂々と私はレズビアンだ〜!!!と叫んだに等しいつまり頭がおかしいのだっと言うかこい

つうちのファミアリアってさつき言って無かったか？流石にこの神様のファミアリアに入っているとは思いたくないがもし入ってる奴がいたら御愁傷様だな！

「つてそうや 結局入るん入らへんどつちや？」

「済まないが俺はロキ ファミアリア に入るつもりなんだレズを司る神様済まないが他に適任な人材がいるはずさ じゃあ「え？ うちがロキやけど？」………は？」

嘘だろこの貧乳が この女が このレズが おいおい冗談だろ流石に嘘だよな？ だって確か北欧神話で超有名な神がこんな こんなの なのか？

確かに俺はゲームとかで出てくるロキを想像していたがこれは流石に無いだろう

まじか 嫌だなく 確かにさ 勝手に勘違いしたの俺だよ俺だけどさく はない だが仕方ない多少は我慢しようそうだよこれをレズの神として思い込めばいいだけだ。

めちやくちやカツコいいあのロキのファミアリアに入れるチャンスだと思えよし大丈夫だ。

「それではお願いします。」

思い込められ無かった。

そして俺は又初めてを体験した。

レズビアン^キと共にホームに入る。

途中恐らくロキファミリアの団員にチラホラとロキが声を掛けていた。俺は失礼だと思いながらまるで田舎の人間が都会を物珍しく辺りを見回し興味津々な観光客かのように

観察をしながら歩いているとどうやらついた様だ。

「ここがうちの部屋や」

酒瓶がまるで前世でみたゴミ屋敷のようにいたる所に散らかっていた。

一応ポーカーフェイスを意識して興味ないふりをしたが、

正直言つてドン引きだ。仮にも人を入れる場所にこんなゴミ部屋に入れるなんて……いや そう言えばそんなやついたような…… そんな下らないことを考えていると

「もうすぐ来ると思うから、ちよつと待つてな」

「ああ わかった。」

あれ俺ホームに入ってからようやく喋ったんじや

クソツ そこ ニヤニヤ するな ホントにイラつく。

そうこうしているうちに、ドアが、ノックされた。

中に入って来たのは、翡翠の髪にそこら辺の女が虫に見えてしまうような美貌。特徴的な尖った耳は恐らくエルフだろう。

次に入って来たのは背はあまり高くはないが筋肉が発達していてまるでどこぞの屈強な戦士を彷彿とさせる。恐らくあのおっさんはドワーフだろう。

そして最後に入つて来たのは綺麗な金髪に整った顔立ち。

幼い外見に似つかわしくない落ち着いた雰囲気醸し出していた。

多分？小人族だ。^{パルウム}

この御三方存在感パネエ

うわあ やっぱ大きい組織を纏めるにはカリスマが大事なんだろうなくこう言うのはやっぱ挨拶が大事だよな！

それにしても神より眷族の方がオーラあるとかこの神プライドとかないのだろうか？

いやまあ 子供のようになんて捨ててちまえと思うが神視点で子供らと言うならば叱ることも考えて行動するものだろう。

それとも人間の視点で見るからダメなのだろうか？

ようわからん？

「おっ！3人とも来たな！」

「なんじやい いきなり呼び出して」

「もうすぐ夕飯の時間だというのに 何かようでもあるのか？」

「ハハッ でそこにいるのが ロキが気にいった入団候補者かい？」

うわあ あの子供いきっちゃってるよこれ恥ずかしいやつだよこれ絶対！

こうゆうのは大人の余裕でスルーだ。

んーあれはドワーフ？つぽいなあ　ロキファミリアのリーダーつぽいけど恐らくリーダーはあのエルフつぽい美人さんだろ

流石にあのおっさんじゃ無法地帯待ったなしだろうしな

つとと言うことで名前出てくるまで待つか

「さて　集まったしさっそく入団テスト始めるで！」

スツとロキの目が変わった。細まっていた目が僅かに開かれた。

ようやく本題に入れるらしい

「自分、なんて言うんや？」

………
うん？

・・・・・・・・・・・・・・・・名前を聞かれた？

・・・・・・・・・・・・・・・・あつそう言えば言つて無かつたつけ

「俺の名はアルトだ！」

そうだよな 俺そもそもこの神に名前言つて無かつたな!!

それにしても何故入団テストで名前を聞くのだろうか？

普通話しかけたらだいたい相手の素性調べるために聞かない？

それともこの神何も考えてない？

いやどちらかと言うと俺に興味ないのか？

きつとそうなのだろうだつてあのレズビアン^{ロキ}だしそうだよなー何で気づかなかつたんだろ？

やっぱり心のどこかで夢かともつというゲームしてる感覚になつているのか？

まあいいや どうせ9999999999っていうこの世界ではどれだけがステータスに載るのかわからない完全チートな別次元な領域にいるしそもそも攻撃を完全に無効に出来ちゃうしはつきり言つて前世のゲームよりも無双出来ちゃいそうだ。

それはそれで嫌だななんというか何かのアニメでこの人達とめちやくちや似てるキャラ見たことある気がするんだよなあー何て言うアニメだつたかなあ？

「アルトっちゆうんやなあ」

レズビアン^{ロキ}が何かを考えるような素振りを見せた。

しっかしあぶねえ今完全にこいつらの存在忘れてた (笑)

そうだよ 今入団テストしてたんだよ!!

よし余計なことは一切考えないようにしないな!!!

「お主は何を求めて冒険者になる?」
茶髪のドワーフが質問してきた。

うーん何を求めてかあ

俺この世界では圧倒的な戦闘能力を持つてるからそうそう負ける
わけないし

かといって金にがめつい訳でもない

モンスターを○しまくりたい訳でもない

うーん前世でもラノベと電子端末以外全く興味無かったし難しい
そもそもこの世界は中世ヨーロッパ位の文明しかないからそもそも
もスマホが無いため退屈だなあ

はあ ここは無難に冒険したいからとでもいつとくか!

「それは冒険するためです。」

こうやって自信満々に言っただけで相手の目を見続ければ大抵は本当だ
と思ってくれるから楽勝だね。

「自分何者や?」ギロ

いきなりロキの目つきが変わった?

それよりこいつのお陰で他の奴等も警戒してきた。

たつく めんどくせえ 一体何がいけなかつたんだ?

「いきなりそんなこと言われてもこちらとしても困るのですか?」

ここは無難に返答するか それにしても俺にはエデュランをも気
づかせない嘘の技術があるの!!!

いや 違うなどつちかつうとあの堕女神だからこそ騙さす事がキ
セキ的に出来たんだ本来は見抜けて当然なのだろう

やっぱあの堕女神の駄目さはある意味群を抜いてるな!!!

って違う今大事なのはこのオラリオで戦闘系最強ギルドの一つ口
キ・ファミリアに敵認定されちゃってるんだよ

それにしても嘘一つついた程度であそこまで敵意むき出しにする
かあ?

まるで 当たり前の事が出来なくて こいつは本当に人間なのか

とでも言いたげな感じだな

．．．．．それじゃね？

うーん？ もしその事を気にしてるなら俺じゃなくて俺を創った存在に文句を言ってほしい!!!

例えばあの堕女神とか いるかわからんが地球の神とかさそうゆう立場にある者が責任取れよ!!

あーめんどくさい 説明したくない 部屋でゴロゴロしたい!!
..... 頑張ろう

「ほんまになんも知らんのか?」

一々敵意出すなよ 好かれようとは思わなかったけどここまで嫌われると気分悪いわ

「ええ そうですよ」

「一つ聞いていいかな? ロキ」
金髪シヨタがロキに聞いた。

「ああええよ!」

頷くロキ 待つてあのシヨタ何者???

めっちゃリーダーシップあるじゃん何なのまじで

「じゃあ聞くけどロキ 一体何に警戒してるんだい?」

あれ? 分かって無かった感じ? ってゆうか良いこと言うな
「あー ゆうて無かったな 実はこの男から嘘が見抜けんのや」

あー そういやそんなのあったな でもその対策したはずなんだがどこまで分かってるんだ？

「?!?!?!」

あの3人組漫才師目指せんじゃね!!

めちやくちやいい反応してんじゃん

目立たないように木を隠すなら森の中にしようと思ってたけどこれ下手したらこの場でばれるだろ

それは何があっても防ぎたいな戦争なんて絶対回避するべき案件だ

それにせっかくの仙人ポジションが全く出来ないとか地獄だろ

絶対美少女弟子を育ててから天寿全うだろ グへへ

おっとそんな下らないこと考えてないでちゃんと考えないと一瞬で終わるぞこれ

知らないふりしかないよな

「えーつと それが普通だと俺は思うのですが？」

よし 多分無意識だと思うが一応警戒度は何段階かは下げてくれた様だ。

やつぱり無知な者やダメな奴は大抵の人間は下に見るよなそうそうそれでいいんだよ

「えつとだね。 君は一体どこから来たんだい？」

まあ常識知らない奴の場合そうなりますよね

「あーつと俺は村と言うよりは集落のような者です。それがどうかしましたか？」

常識知らない奴なんて相当な情報不足になるような場所出身じゃないとそうそう見つからないからこんな物だろう。

「そうか 聞いて悪かったね」

さつきからシヨタが完全に仕切ってるなまるで団長のような立ち

位置だな

「いえ 常識知らずだと何度も言われているので気にしないで下さい。」

この言い方なら絶対根掘り葉掘り馬鹿みたいに聞いてくることは無いだろう。

よし 後は入団テストへと話題を戻せば完璧だ

「あのー そろそろ入団テストへと戻しませんか？」

どうだこの天然発言 空気全然読めて無いだろう。

頼むからのれ！ のれ!!

「あー 何か納得出来ひんけどこのまま続けるんもなんやし 入団テストを続けよか」

サンキュー やつと空気が緩和していった。

「さつきから気になっていたのですが御三方の名前はなんというのですか？」

「ハハ。これは済まない僕は団長のフィン・ダイナム二つ名は【勇者】^{ブレイバー}。」

「私は副団長のリヴェリア・リヨス・アールヴだ。」

二つ名は【九魔姫】^{ナイン・ヘル}だ。」

「僕はガレス・ランドロック。二つ名は【重傑】^{エルガラム}じゃ」

……………あれまじで団長？

おふぎけ関係なくあのシヨタが団長？

笑えねー って言うか自分で勇者（笑） ってww

まじかー 自分で勇者っていつちやうかー めちやくちやキツイ
な

中二病でもそんな事を堂々というやつ世界広しといえど多分お前
位だよ。

俺だったら鬱になっちゃうよ 確定で鬱になるよなんなら渋谷で
プリキュアの衣装着て私のこと可愛いーっていつちやうよりキツイ
と思うよ まじで!!

「えーつとよろしくお願いします。」

何か空気が重い重いよ

早く合格したい!!!!

「では 次は私がお前は、仲間が危機に陥った時どうする？」

リヴェリアさんまじでそうゆう系来ちゃいますかー

こうゆうのつてめっちゃ意地悪だと俺は俺は思うわけですよ

ほんと勘弁してほしいそりゃ美人・美少女なら何がなんでも助けようとは思うけど男は見捨てる一択じゃないよな！

だって俺の目当ての子にそいつが手を出すかもなんて考えたくもないだからこそ間引きは必要不可欠だと思うわけですよ

………うるさい自分が小さい人間なんて誰よりもわかってんだよ。

でもさ考えても見ろよ男が一人と男が多数の場合どつちがハーレムを形成しやすいかをだいたいあの某アニメの誠よりは全然マシな人生を送らせることは誰でも出きるだろ？

この世界ハーレム大丈夫なところだしってまた脱線した。

質問が曖昧過ぎるんだよなー

助ければいいのか？見捨てる覚悟を見たいのか？

どうとでも受け取れるから答えが知りたい

だいたい誰彼構わず助けるのははっきり言って無理だしもし助けたとしても暫くは養うことが義務になるかも知れないそんなの自分が許容出きるならいいけどただのクズやブスを助けたらはっきり言って人生しんどいだけだ

だからこそ思うのだハーレムでイチヤイチャしたいと

はいやりましたー またやりましたー

ちがいますー 難し過ぎるのが問題なんですー

だって考えても見ろよ 野良猫一匹助けるだけでも一生養えって
言われるんだぜ!

下手したら半奴隷見たいな立ち位置とかせめて美少女・美人で味わ
いたいだろ?

おっさんとかブスとか嫌すぎるだろ?

結論 美少女・美人は何がなんでも助ける。逆に男やブスは助けな
い方向で

うん 人間なんてこんなもんだよね

「(美少女や美人を) 何がなんでも助けきります。!!!」

嘘はついてない。

ただ言葉が足りないだけだ。

おお リヴェリアさんがちよつと微笑んでる。

ちよつとドキつとしちやったよ マジで

「それじゃあ最後に... 君は僕たちと、ファミリアの為に命をかける
覚悟はあるかい?」

は

ちよつと何言ってるのかわかんない?

あのさー それ実質契約見たいなもんじゃないですかー

チツ 折角ここまでこれたのに助けなきやいけないじゃん

マジかー 知らぬ存ぜぬで通せなくなつた。

もうちよつとだったのになー

しかし俺の異世界生活はまだ序盤の序盤仕方ねえから引き受けるか

もしかしたらそこで出会いがなんてモブでもあるんだ俺が出会わないなんて通りはない！

さあーってなんて言おうかなー 無難に答えれば良いんだけどでもなーこのまま負けるのも癪だなー

よし 決めた絶対 後で泣かすこのシヨタ団長!!!

「そーい、やこいつに命かけろって言われたんだよな？」

俺がリアルで命かけたことってゲームで3日間連続プレイしてたときだよなー

課金しても課金しても出てこなくてそれだけ揃わなくて諦めるのはめっちゃくちやムカつくから限界を超えてやり続けようやく揃えたんだよなー

あれを何回も繰り返す上級廃人は流石としか言いようがない。

そういう意味ではそれなりに死線を繰ぐってきたと言えるのでは無いだろうか？

うん死線は死線だ。

それは正しいが只の自業自得とも言うだがそれは冒険者も一緒だ！

死にたくないなら最初からダンジョンに潜るなって話だ。命を奪うのならば命を奪われる覚悟は持つておくべきだ。

つとと言うことで肉の専門家たちに黙祷……………

ヒューー ヒューー 吹けてないとか言うなよ！ 絶対に言うなよ

！
フリじゃないからな！ 絶対違うからな！
ネタじゃないからな!!!

えっ？ 茶番が長いって？

この小説茶番の塊見たいなもんでしょ？

よしっ ようやく答えが出そうだ

「ええ勿論（美少女・美人限定で）命をかける覚悟はあります。」

シヨタ団長大きく頷きやがった。

ハハッ こりやサイコーっただわ!!!

ここまで綺麗に騙されてくれるとか楽勝なんですけど

大丈夫ですかー やっぱり経験不足なんでちゅかー

そうでちゅよねー いくら だからって種族に頭の良し悪しは関係ないんでちゅよー

これまじでバレてねえとかサイコーだわ!!!

俺凡人ですぐに顔に出るとか言われてたのに全然バレてねえよ

いやー ここまでうまくいくと吹き出しそうになっただからまじで危なかったわー

やっぱり異世界系は見るより体験だな！

「ここまで聞いたけどまだ質問があるものはいるか？」

シヨタ団長が周りを見渡しながら決を確認していく。

俺も確認はしているがどうやら誰も質問することが無くなった様だ。

こちらとしても助かった。

「では これより冒険者アルトをロキ・ファミリアに入ってよいと思うものを手を上げてくれ」

そこには一応手を上げるロキや不満は特にないと思っっているだろうガレス歓迎とまではいかないがそれなりに好感触が態度で現れているリヴェリアそしてニコニコしているシヨタ団長全員が手を上げていた。

いや ロキそこはもうちよつと愛想よくしよー！

いやまじで！ 一応アンタから誘ったんだからさ！

それとも人間の常識は神には通用しないのか？

いやでも大きな組織にはそれなりにカリスマ性が…

なるほどそれはシヨタ団長が全て引き受けているからまだ存続できているのか？

いやでももう少し手伝ってもいいと思うのだが

何言っても無駄か

「さっ—て 入団テストも終わった事やし早速、恩師刻もうか」

先ほどの態度とは180度変わっていきなりアホっぽく？
いやこれが素なのだろうそう思っておこう

「まず上半身脱いでそこで横になつといて」

「はあ わかりました」

俺は仕方なく上半身の服を脱いで近くにあったソファア—で横になった。

「早速、恩師刻むで」

ロキが自分の人差し指に針を刺しその血を背中に軽く塗った

「終わったで あとはステイタスを・・・」

ロキは背中に紙を乗せる

「できた はい、自分のステイタスや」



カイル

L v. 1

力：I 0

耐久：I 0

器用：I 0

敏速：I 0

魔力：I 0

《スキル》

【健康】

- ・ どれ程無理をしてもいつも通りのポテンシャルでいられる。
- ・ 状態異常を無かったことにさせる。

【天才】

- ・ 飲み込みが人より早い。

【ステータス顕現】

- ・ ステータスを顕現させ自分で見ることが出来る。
- ・ 見た者の名前・見た物の名前と効果を知る事が出来る。
- ・ ステータス再振りが可能。
- ・ 恩恵には干渉出来ないがそれ以外のステータスであるならば代償^金を払うことによりステータス内の様々な物に干渉可能。

【自動再生】

- ・ HP・MPの半分を0.000000001の早さで再生する。
- ・ 腕や足がもげようともすぐに再生する。

【成長限界突破】

- ・ 例え世界が限界だと決めてもそれを無視する。
- ・ 圧倒的速度で早熟する。

【不老】

- ・ どれだけ年を取ろう体に変化はない。

【免罪】

- ・ 自分が罪だと認識した事のみ免れる事が出来る。

【強者への渴望】

- ・ 早熟する。
- ・ 強者と認めるまで効果上昇。
- ・ 渴望の丈により効果上昇。

【ネットショッピング】

- ・ 見る・買う事 出来るようになった。

【創造】

- ・ 創造した物を念じて創れる。



うん？

見たことも無いスキルがあるのだがどうゆうことだ？
まさか この世界に来てから発現したスキルなのか？
もしそうなら俺 結構チートじゃね？

だいたい異世界系物のチートって一個の奴もあんじゃん

まあ途中からチート増やしまくってどうオチに持っていくか予想
したりして楽しみまくった時期があった。

「……………な、何やこのスキルの数?!?!」

「……………これはすごいね」

「……………これはヤバイ拾いもんしてもうたな」

「……そうだね」

何やらレズビアン^{ロキ}とシヨタ^{ファイ}が話し合っていた。

一方 リヴェリアさんとガレスはいまだに驚いて硬直している。

「あの一 お話されてるところワルいけどさ、俺どこで寝ればいいのか？ もしかしてこの建物？」

「そうやでー」

ロキが頷き帰した。

「……ふーん、これからの予定はどうすればいい？」

「……そうだね ギルドに行つて冒険者登録してこようか。そのあとお試しでダンジョンに行くよ」

そうして俺は張れて冒険者になった。

さて、いきなりではあるが今わりとめんどくさいことになっていく。

ファルナを貰ったためギルドに登録しなければならぬのだがダンジョンに付き添いきた人物が問題であった。

今、俺が連れているのはこのオラリオ最大派閥の一つであるロキ・ファミリアの団長フィン・デイルムナだ。

何が起るかとどうと？

『おいおいあれフィン・デイルムナじゃあねえか？』

『隣のやつは誰だ？』

『凄そうには見えねえけどな？』

……まあチラホラ聞こえて来るわけだ。大きな組織は目立つからな。まあいい。表のメンバーのことでどうせすぐ俺のことなんて忘れるだろうそうならないとこのファミリアに入った意味ないしな。

そう言えば俺の担当ギルド職員って誰になるんだろ？

そんなどうでもいいことを考えながらギルドへと足を進めた。

しっかし相変わらず他と比べてでけえ建物だな

「カイルくんこっちだよ」

一度ここへ来たとはいえ年甲斐もなく観いってしまった。東京に観光くる人達ってだいたいこんな気持ちなのかな？

「ようこそお越しくださいました、ロキ・ファミリア団長フィン・デイルムナ様。本日はどのようなご用件で？」

「彼の冒険者手続きをしに来たんだ。手続きをしてもらいたい」

「承りました。．．．この羊皮紙にお書きください」

ギルド職員が羊皮紙と羽ペンを渡して来た。

さてこう言うとき転生者、転移者達は替わりの人やギルド職員に頼むのだろうが生憎俺は【共通語】コイネー【神聖文字】ヒエログリフを読み書き可能な為、日常生活に支障はない。

各項目には名前や所属ギルド出身地などが書かれていて

俺は名前と所属ギルドのみを書いて出した。

そのあとは初心者への軽い説明を受け早速、フィンとダンジョンへと潜った。

基本形は円錐構造をしていて1階層進むごとに階層全体が広がる。

また上層、中層、下層、深層の四つの階層に分かれモンスターは住み分けている。

より深い階層のモンスターが上がることはたまにあるがその逆はほとんどないに等しい。

そう言えば俺の今装備している防具は所詮何も効果がないライトアーマーで剣も普通の西洋剣にしている。

さすがに効果付き防具や剣は目立つので今回は大人しくしているつもりだ。

いざ挑んで見るとゴブリンはまあ雑魚なので瞬殺だ。

そんなどうでもいい報告はいいだろう。

問題はコボルトだ。なんだあれいやまじでばか正直に突っ込んでくるとか最早狙ってくださいといってるようなものだ。

はつきり言って消化不良が過ぎるのでフィンに6階層まで付き合ってもらった。

リザードやフロッグ・シューターはゴブリンと大差なかったマシンなのはウオーシャドウだけであった。

まじで弱すぎた。

「はあー」

腕をちぎっては倒し頭を潰しは倒し首を絞めて倒し

・・・正直言つて飽きた。

だってほぼ同じ反応なんだもんいつそのこと自害してくれたらこつちも助かるのになと思いつながら倒し続けていた。

今俺がいる階層は10階層である。

普通はパーティーを組んで挑むらしいだが俺は本当にそうなのか？つと疑うことしかできないだつて明らかに考え無しが多すぎる何？本当にさまるで俺の事を餌と判断されてる節がある。

だけど換金するときウハウハなので一概にダメと言うことも出来ない初心者冒険者は常に金がないどうして金が必要なのかは昨日の帰りに起こつたことだ。

フィンと共にロキ・ファミリアのホーム【黄昏の館】へと戻り俺の部屋は何処なのか聞こうとした時事件は起きた。

『団長ー』

巨乳のアマゾネスがシヨタ団長に飛び付いていた。

つと言うか押し潰していた。 凄いなーよく息続けられるなと思つた。

「ちよつ テイオネー待つてよー」

後ろから貧乳アマゾネスと金髪に鎧を纏つた美少女が現れた。

そうこの時が分岐点であつたのかも知れない。自分のチートをもつと理解しておくべきであつた。

いや違ふこの世界は仮想ではなくあくまでリアルだと認識しやれることは全てやつておくべきであつた。

「あなた危険だから私が殺る。」

・・・ちよつと何言ってるのかわからない？

何かいきなり刃物をこっちに向けて突っ込んできたんですけどー
ちよつ・・・まじでどんな頭してやがる。

一応ここ街中だぞ仕方ないので左手で剣を受け止め右手で腹パン
したあとすかさず剣を地面へと落とし足で脇腹へと蹴りを入れ相手
の姿勢を崩し空いた手で顎に手加減した突きを入れ相手は倒れた。

ここまで僅か10秒そして俺はその後メチャクチャ後悔した。

目立たない様にしたかったのによりもよって街中で戦闘行為し
ようとする狂人女のせいで目立つちゃったよ。

シヨタ団長完全に見ちやったよ。

頼むからまじで頼むから見てないと言ってください。

本当に頼むからと思いついんへと視線を向けるとまだ巨乳に押し
潰されていた。

・・・よっしやあー!!! 勝ったあー!!!

そしてナイッスウー!!! 巨乳 これ誤魔化せるこの波に乗って最
高の言い訳降りて来てくれえー!!!

もう嫌なんだよ 中途半端な人間にだけはなりたくねー!

・・・これほど見事にフラグを建てていた過去の俺を殴って蹴って
金的、目潰し、してやりたいそんな後からくる後悔の事など端から考
えにいれていないやはり俺は同じ事を繰り返すかもしれないだって
完全に忘れている人生がクソゲーの塊であることを

……完全に忘れていたよ君の存在を貧乳アマゾネスちゃん。

最初気づいた時は金髪美少女が何故か俺に身を預けていたため疑問に思ったんだろうな程度にしかわからなかった。

反応が分かりやすかったため俺は目をそらしたかったのだろう驚愕したあの間抜けズラを異性に体を任せただと決めつけたかった。

やはり世界は残酷だ。

上手く事がなかなか進まない必ずどこかで失敗する。

とにかく考えるしかない大声を出さない辺り硬直しているのであろう逆に言えばそれほどの出来事だと言うことだ。

それにしても町の人達無視してるな何だ？

仮にも冒険者が街中でそれも恐らく高レベル冒険者なのだろう明らかに身体能力が高い(俺でなきや見逃しちゃうね。)この街には冒険者同士のいざござは基本無視することがギルドで言い渡されているのか？

それとも日常レベルで冒険者が問題を起こしまくっているのか？

後者なら冒険者本当に傍迷惑な存在だ。

まあ俺もその冒険者何だけでもね。

その後貧乳アマゾネスに金髪美少女を預けて俺はそそくさと撤退した因みに思考時間含め僅か5秒である。

中々に人間止めてるなど今更ながらに考えふけていた。

無事ホームへとたどり着き見張りに諸事情でそれなりに伝え納得してもらいさあ!!?後は自分の部屋を誰かに聞くだけと思っていたらリヴェリアさんが話しかけて来て何故か勉強することになってしまいました。

はつきり言って全部頭にはいつてるんすけどね。

ダンジョンのモンスターとかその対象方法とかまあ俺、チートなんでもそもそもないが先輩をたてるという意味で余計な発言はしな

いで黙々と真面目な好青年風に授業を受けていた。

そんなこんなで時間が刻々と過ぎていき夜ご飯の時間となりました。

食堂では問題を起こされないよう現在所持している隠密系の最高峰の妨害用魔道具で阻止した。

後一応、オラリオで起こった事件を抹消した。

よくよく考えたら目立たない為にここに来たのに目立ったら元も子もないと気づけたからだ。

自分の危機管理の無さが改めて実感した。

その後はようやく自分の部屋を聞き出せいの一番に寝た

Z Z Z

目を覚ますと其処は知らない天井だった。

いやこれ異世界物で達成したかったこと上位だったから嬉しい。

やっぱ異世界物はチートな主人公がハーレムを増やしまくるご都合主義は好きでも嫌いでもなかったがいざその半分を体験してみても思ったことがある。

異世界超不便!!!

ちよつと日本の便利さが恋しくなっちゃった。